

# econ. No. 32

## 特集 経済学! 白熱研究室! 座談会「ピケティをめぐって」

★研究室訪問 中園桐代先生 (2 ページ) ★合同基礎ゼミ開催 川村雅則先生 (4 ページ)



Yoshiharu Kamiyama

★連載  
私の履歴書  
太田和宏先生 (5 ページ)



★news 1 特別講演会  
「わが国の財政の現状と課題  
国と地方の視点から」  
(6 ページ)



★news 2  
1部経済ゼミ対抗ソフトボール大会  
(8 ページ)



★news 2  
就職情報  
(8 ページ)



★interview  
働きマン⑮  
浜中裕之さん (7 ページ)



Hironori Morishita

★column  
From a Distance  
犬飼裕一先生 (6 ページ)



# ピケティをめぐって!



Sadaharu Oya

★news 1 特別講演会  
「コロンビア先住民族の声を聞く」  
紛争のない未来へ〜紛争・故郷・生きるための知恵の話  
(6 ページ)



Ken Hirano

トマ・ピケティ (仏、1971〜)

フランスの経済学者トマ・ピケティの『21世紀の資本』(2013年)が、世界中で話題になっています。日本語訳は700ページもある本ですが、すでに約13万部売れ、その経済的不平等の研究、主張は日本の国会でも取り上げられました。

特集

# 経済学！白熱研究室！ 座談会「ピケティをめぐって」

経済的不平等、格差問題を扱った700ページに及ぶ経済専門書、世界各国で100万部以上を売り上げた経済学者トマ・ピケティ(仏)の『21世紀の資本』。ピケティはいったい何を語っているのか。本学経済学部の先生方が「ピケティをめぐって」熱く語る。また、経済格差を別な視点から捉えた中園先生の問題提起、入学間もない1年次の基礎ゼミナールでの経済学へのアプローチも紹介する。

## 「21世紀の資本」を読んで

**森下**●フランスの経済学者トマ・ピケティの『21世紀の資本』(2013年)という本が、いま世界中で話題になっています。昨年日本語訳が出ました。700ページもある本ですが、すでに約13万部売れたそうです。「資本を持つ者と持たない者との所得格差は放っておけばどんどん広がる」という彼の主張は国会でも取り上げられましたね。そこで今日は、ピケティをめぐって3人の先生に大いに語っていただこうと思います。まずは一読されてのご感想をお聞かせください。

**神山**●理論構造が非常に単純で分かりやすいです。たった3つの式で論じていくんで



●神山 義治 先生

すね。格差が世界中で問題になっている中でこの本がこれだけ流行ること自体、注目すべき社会現象だと思います。

**大屋**●格差構造の成り立ちを、各国の2～300年にわたる膨大な統計資料を駆使して、しかも一般の読者にも分かりやすく描き出そうとしているところに、研究者としての誠意を感じます。

**平野**●貧困と格差を論じているというので、当然、私が専門にしている発展途上国についても触れているんだろうと思って読んだら、あまり出てこないんですね。分析対象が国民経済、国民国家の単位になっていて、世界システム的な視点が弱いと感じました。

**神山**●私はこの本を、ピケティによる「経済学批判」の書と読みました。単なる経済学ではなく、社会の全体像をきちんと捉えていく「ザ・社会科学」とでも言えるような大きな構えを感じます。実際の社会問題にアプローチしながら、単なる抽象的なモデルではなくて、歴史的な動態をきちんと取り入れている。

**大屋**●格差拡大の説明には成長率や資本収益率といった抽象的なパラメーターが用いられるんですが、それは真空状態の中にあるわけではないんですね。1980年代以降

のアメリカ、イギリスでの保守革命とか、文化的要因や心理的要因による貯蓄行動の変化とか、そういう多面的な社会的要因をきちんと取り込んで論じなければいけないと随所で述べてますね。社会科学の総合としての経済学、歴史学や道徳哲学などと一緒にとなっていた古典派時代の経済学の構えを再評価して現在に問うという姿勢がはっきり見えますね。



●大屋 定晴 先生

**平野**●ピケティは歴史的なパースペクティブで問題を捉えていこうとしているんだけど、長いスパンで見れば見るほど、植民地政策やモノカルチャーの問題が大きくなると思うんですね。世界的な資本税の提案も非常に面白いと思うんですけど、ここでは途上国との関係とか世界システムと

経済学！白熱研究室！「ピケティをめぐって」

研究室訪問

中園桐代先生



—貧困と教育機会の  
不平等を考える—

皆さんは「子どもの貧困」から何をイメージしますか？ 学校に行かずに働く途上国の子どもたちの姿を思い描く人が多いのではないのでしょうか？ だから自分に関係ないと思っている人、多くないですか？ 残念なことですが、日本でも「子どもの貧困」問題はあります。そして、もっと残念なことですが、親の経済状況によって子ども・若者の進路が大きく変わることが明らかになっています。

皆さんが中学3年生の時のクラスを思い出して下さい。高校へ進学しなかった人、何人いますか？皆さんの年齢によって答えは違うかもしれませんが、高校進学率は1974年には90.8%と9割を超え、現在では100%近い高い水準で推移しています。2014年の生活保護を受けている家庭の子どもの高校進学率は、通信制や定時制も入れても90.8%です。約1割の子どもが高校へ行けていません。全国では98.4%の学生が高校へ進学しているのに。

生活保護とは、高校の政治経済の授業でも習っていると思いますが、国が定める

しての視点が本来必要なんだと思うんですが、そこが抜けているという感想です。

### ピケティの主張 $r > g$

**森下**●ありがとうございます。それではここでピケティの主張を確認しておきましょう。先ほど3つの式というのがありましたね。 $\alpha = \beta \times r$ 、 $\beta = s / g$ 、 $r > g$ の3つです。まず、総所得に対する資本の比率を示す $\beta$ についてですが、これは長期的に貯蓄率 $s$ と成長率 $g$ の関係で決まります。ピケティは、人類の長い歴史を見ると、4%とか5%といった高い成長率は例外で、ずーっと1%以下、高くても1.5%くらいだと言っています。そうした低い成長率のもとで継続的に貯蓄が行われていくと $\beta$ は大きくなります。長期に及ぶ統計データを用いて $\beta$ の変化を追っていますが、第一次世界大戦の頃から1950年頃までの間に戦争による破壊で一度ぐっと落ちるんですが、そこからまた再び高まっています。この $\beta$ に資本収益率 $r$ をかけたものが、総所得に対する資本所得の比率 $\alpha$ です。 $r$ に大きな変化がないとすれば、これは $\beta$ の大きさに比例して大きくなります。さらにピケティは、 $r > g$ を歴史的事実として指摘し、このことが $\alpha$ の高まりをもたらしたと言っています。



●森下 宏美 先生

**大屋**●ピケティは、資本収益率や成長率の変遷を紀元1世紀あたりから示したりして



いるんですが、その頃の高利貸し資本の収益と19世紀以降の産業資本主義のもとの資本の収益が、同質的に語られて良いのかということから、実は直感的につまずくんですよ。

**神山**●ピケティの場合資本と富がイコールです。取引を通じて収益をもたらす物的な富はすべて資本と定義されていて、どういう生産関係において富が資本になるのかという観点で弱く、個人主義的な分配の視点にとどまっている感じを受けました。例えば資本には人的資本を含めないと述べてますね。しかし、産業資本の循環を考えるとその中に労働力=人的資本は構成要素として入ってきて、利潤を生み出す源泉になっていますよね。

**平野**●ぼくが気になるのは、児童労働などのアンフェアなもの、イリーガルなもの、つまり統計数値で捉えられないものが分析対象の外に置かれてしまっているのではないかということです。そのことが、途上国に関する記述がないことと関係しているのかなと。そうだとすると、先進国の中だけの議論に止まってしまう可能性も十分にあるかなというふうに思うんです。

**大屋**●先ほど神山先生が指摘された個人主義的な分配の視点に関連してなんですが、ピケティは、「私たちの民主主義社会は能力主義的希望に基づいている」と言って、能力主義を装った労働所得の異常な格

差とか資本所有に基づく格差を批判します。そこには、純粋な能力主義に基づいた労働所得の格差は是認するという考え方が強固にあるような感じがします。

**神山**●たしかにピケティには、賃金は結局は努力の対価であるのが正しいという、極めて原子論的な社会観がかなり強くあるように思いますね。

**大屋**●しかし、能力は個人のものという次元で議論すること自体に限界があるように思います。例えばマルクスのいう生産力は、労働の集団的な生産力であり、社会的な人間の繋がりの中で出てくる人間のポテンシャル性なわけですよ。この議論は、経済学の社会哲学みたいなものを考える場合、非常に重要なんじゃないかと思うわけです。

**平野**●マイノリティなり多様な人間が存在できるような社会っていうふうな視点が、今のところのピケティには十分論じられていないのかなというふうな気もします。



●平野 研 先生

家族の人数や年齢によって決まる最低生活費を下回っている場合に、国民に健康で文化的な最低限度の生活を保障する制度です。

今度は高校3年生のクラスを思い出して下さい。大学に進学した人は何人いますか？ これは皆さんの年齢、性別、あるいは高校によって差が大きいでしょう。大学進学率は1990年の24.6%から2000年には39.7%となり、2009年以降ほぼ50%を超えています。2014年の生活保護を受けている世帯の子どもの大学への進学率は19.2%、全国の高校生（過年度生等含む）の51.5%以上が進学しているのに、です。

もちろん進学だけが人生の選択肢ではありません。しかしながら、生活保護を受けている家庭では、親が進学の費用を準備できないため子どものチャンスが奪われているのが今の社会の現状です。経済学はお金の流れから社会の仕組みを理解し、その問題点の解決策を考える学問です。若い皆さんこそ、多くの若者がチャンスをつかめる社会の仕組みを考えて欲しいと思います。



中国先生の講義風景

## 経済学を学ぶ人たちに

**森下**●そろそろ時間がきました。最後に一言ずつお願いいたします。

**神山**●不安定性を拡大する不均衡化への力が資本主義には常に働いている。それに対して、民主主義による資本主義の包摂を説いている。20世紀の初めにケインズが「自由放任の終焉」を書いたけれども、21世紀の初めにピケティが言ったことは大きなメッセージになっていくと思いましたね。高校生には、経済学が人々の幸福を考える学問だっていうのを知ってほしいと思っています。

**大屋**●国際的な資本課税などの彼の主張は、おそらく今のフランスの中道左派の中にある議論だと思います。フランスでは、国際的に資本をどうコントロールするか、今のグローバリゼーションとは違うもうひとつのグローバリゼーション(オルター・グローバリゼーション)を目指す議論が、90年代の終わりから市民運動のレベルでずっと出ているわけですが、ピケティはそうした

オルター・グローバリゼーション運動の一角を占めている人間なんだと解釈しています。そういう文脈の中にピケティの議論を置き直して評価することが必要じゃないでしょうか。高校生の皆さんには、今の世の中どうなってるのかを考えるために、ピケティのような幅広い視点からする経済学はとても重要ですよ、と言いたいです。

**平野**●ピケティがこれだけ幅広く議論されるようになったのは、統計的な裏付けをもって経済をもう一回見直してみるということで、いろんな人が議論の場に立てるよ

うになったからだだと思います。世界的な資本税の主張の中で、世界的な資本主義に対して民主主義が対抗しなきゃいけないという話をするわけですが、そうであれば民主主義も国際的な民主主義じゃなきゃいけないわけですよ。選挙権が18歳からになりましたが、高校生も大学に入ったらずい投票行動をしなきゃいけない。民主主義の一翼を担う人としては、国際的な問題に対しても視点を持ったうえで投票してほしいと思います。

**森下**●ありがとうございました。



## 経済学!白熱ゼミナール!「合同基礎ゼミナールで、学生アルバイト問題を考える」

6月26日、7ゼミ(浅妻、宇土、大屋、神山、田中、松本、川村)合同で基礎ゼミナールを開講した。テーマは大学生のアルバイトで、お互いのバイト経験をグループで聞き取った後に、ワークルールを学んだ。

日本学生支援機構や全国大学生生活協同組合連合会の調査結果から推測すると、大学生のアルバイト経験はおよそ7割前後となるだろうか。実際、1年生を対象に本学で実施されたアンケート調査(2014年12月時点)でも、4人に3人の割合でアルバイ

トをしている。

よい社会経験になって好ましいではないか、と悠長なことを言われていられないのは、いわゆるブラックバイトの報道からも明らかだ。基礎ゼミ生とアルバイトの話をする、例えば、契約以上の勤務シフト、賃金不払い、ミスに対する弁償や商品販売ノルマなどが、ぼろぼろ出てくる。いや、そもそも、ワークルールを知らずに働き始めている学生が少なくないのだ。これはまずい、と今回の企画に至った次第である。

こうした問題が生じる背景や対策を考えるには90分は短すぎる。学生それぞれに「研究課題」として持ち帰ってもらった。短時間とはいえ、知らないことを学ぶ楽しさ、みんなで学び合う楽しさにふれる機会になったのではないと思う。[川村]





## 私の履歴書

太田 和宏 経済学部教授  
[西洋経済史]

おおた かずひろ

### 経歴

1947年 福島県東白河郡に生まれる  
1972年 東京教育大学文学部卒業  
1976年 京都大学大学院経済学研究科博士課程退学  
1976年 北海学園大学経済学部講師、以後助教授を経て現在に至る

### 主な研究業績・著書

単著『家父長制の歴史構造』ミネルヴァ書房、1996年  
単著『オフサイドの自由主義』ミネルヴァ書房、2001年  
共訳著・ルーヨ・ブレンターノ『わが生涯とドイツの社会改革』ミネルヴァ書房、2007年  
論文「エルンスト・エンゲル、もしくは『脂ぎった下僕』とならない生き方について」、『北海学園大学経済論集』63巻1号、2015年



### 誰にもある貴重な経済的体験、そして父

経済現象が繰り返られる空間はとてつもなく広い。個々の経済活動やそれらが取り結ぶ関係は気が遠くなるほど複雑だ。さながら宇宙的といってよい。私たちは時間的にも空間的にも絶対的にわずかな活動領域しか持たない一人間として、この広大な空間を眺め、少しでも精確に理解しなければならない。研究者たるか学生たるかを問わず、それが経済学徒の務めだからである。ちょうど天文学を志す者が、ちっぽけな地球の片隅から、宇宙を見上げるのと同じである。

このような事情は、私たち一人ひとりにとって、直接に目で見、手で触れ、声を聞き、感情に接することができるような、つまり直接体験できるような経済現象（それは社会への窓口でもあるのだが）も絶対的に限られていることを意味する。その結果、経済現象とは自分とは直接関係のない、遠くの、よそよそしい世界で繰り返られる営みということになってしまう。リアリティーが感じられないのである。勉学意欲がわかないのもむべなるかな、というものだ。

このようにして、対象へのいきいきとした関心を育てる上で、体験が特別な意味を持つことになる。ところが一人間の体験は限られているのはすでに述べたところで、ましてや青少年期の経済的体験などは皆無に近いと思われるかもしれない。だが、青少年期に社会への窓口となってくれる数少ない貴重な経済的体験が、ほとんど例外なく誰にでも備わっているということは、改めてかみ縮めておいていいのではないだろうか。それは親の職業生活である。店主、農民、漁師など自営業主は、ほとんど生きた教材となる。子供は親の職業にまつわる喜怒哀楽を直接に体験して育つ。それに比べれば、会社員や公務員などは仕事の内容や働き振りを子供に伝えることは、難しいかもしれない。それでも、時間に対する観念、組織人としての姿勢、仕事をまっとうしていくうえでの考え方や倫理、などが知らず知らずのうちに、身についていくものである。公務員の家で育った子は、発想が堅実になるというではないか。また、知識人の家庭で遺産相続がどのようにおこなわれているかは、ブルデュー『遺産相続者たち』を読めばよい。

私の場合、父の職業は江戸時代から続く日本橋の小さな商家の奉公人であった。奉公人は一人か二人だったので、丁稚と番頭を兼任していた

ようなものだろう。小学校を卒業してすぐに奉公に出たから、山本有三や下村湖人の世界を地で行っていたといっていだらう。給料は、私が大学に入ったころ、つまり父がまもなく還暦を迎えようとしていたころ、大卒初任給とほぼ同じくらいであった。そんなつましい生活だということに、古い商家に勤めているというだけで、妙なプライドを持っていた。それが母には理解できなかった。

父は、和紙を糸でとじた数冊の本しかもっていなかった。それは長唄の本で、日曜の午後など、ラジオのそばでよく呻っていた。父は末っ子の私をことのほかかわいがってくれて、奉公先や浅草などにしょっちゅう連れて行ってくれたのだが、歌舞伎座の一番後ろの立見席にも何度か連れて行ってくれた。幕が上がって役者が登場すると、突然父が「音羽や！」などと大声で怒鳴ったときには、本当にびっくりした。コンサートには「ブラボー屋」がいると聞いたことがあるが、歌舞伎の「声掛け屋」は実に難しいものであるようだ。せりふの途中などでも怒鳴ったりするから、役者とぴったりと息を合わせなければならず、自らも俳優のように演ずるものらしい。だから芝居を盛り上げたい座のほうから見ても、有能な声掛け屋は重宝したらしく、顔なじみになると只で入れたというが、父は果たして只だったのだろうか。とまれ、あれだけの芸域に達するには、丁稚のころからどれほど歌舞伎座に通ったことだろう。のちに落語の「四段目」という噺を聞いたとき、「あっ！、これは父のことだ」と心の中で叫んだものだ。それは外回りの仕事を命じられた丁稚が、ことあるごとに歌舞伎座に寄り道をし、罰として閉じ込められた土蔵のなかでも、忠臣蔵四段目を演じているという噺である。私は父から、財産も教養もなく、趣味の世界で楽しむことができるということをお教わったような気がする。

### 炭鉱まちでの生活体験と研究者としての志

私は疎開先の福島県の海岸通りに近い山村で生まれたが、そこには常磐炭鉱があった。私が4,5歳のころだったと思うが、友達と遊んでいるときに、何かの弾みで、炭鉱の斜坑入り口のトンネルのところに出てしまった。半円形の大きな口がぼっかりと口を開け、その先の暗闇にはレールが緩やかに下っていた。面白半分地上の光が届かないあたりにまで入ってみたが、その先の闇の中に何があるのかという恐怖に震え上がったこと

を覚えている。父が戦争から疎開先に戻ってからの一時、この炭鉱で坑外夫として働いたことがある。私が高校生のころ、相変わらずの苦しい生活に愛想をつかした母が、父のふがいなさをなじるときに、このときの話を持ち出すことが何度かあった。曰く、坑内夫として働けばもっと稼げて少しは楽になったのに、臆病で意気地がないものだから、安い賃金の坑外夫としてしか働けなかった、と。父が怖くて入れなかった坑内とはどんなところなのだろう。どんな人たちがそこに入り、どんな仕事をし、どれほど稼ぎ、どういう生活をしているのだろうか。のちに研究者を志し、経済の生産活動を特定の産業において詳しく見ておくことの必要性が感じられたとき、心の中から湧き上がってきた動機は、このときの母の嘆きと、父の恐怖心に基づくものだった。

炭鉱業を研究対象とする以上は、現場を見ておかなければならなかった。幸いなことに、赴任したころの北海道には、まだ操業を続けている鉱山がいくつもあった。それらのなかで赤平、歌志内、夕張から許可を得て、操業中の坑内を見学することができた。それは一言で言えば、荒々しく過酷な職場だった。わずか2時間程度の見学で、目じりには真っ黒な炭塵がたまり、のどはむせ返った。何よりも光のない穴倉の圧迫感が迫ってきた。都会育ちのひ弱な父に勤まるはずがなかった。こうした体験を通じて私は、労働することの意味を少しわかったような気がしたと同時に、父のことも少しだけわかったような気がした。

このような父の職業生活と、それに伴う家庭環境は、私の研究生活の根っことなった。その根っこから吸い上げる養分があまり豊かなものではなく、その結果、成果も見栄えがしないということについては、今となってはいたしかたない。どうやら紙幅も尽きたようだ。母の職業生活については、別の機会に譲りたい。



閉山後の夕張炭鉱選炭場 1980年 photo: I. SASAKI

[平成27年6月1日] 発展途上国論特別講演会

## 「コロンビア先住民族の声を聞く 紛争のない未来へ」

講師 ● ホセ・メロ・チンガル氏

柴田大輔氏 [フォトジャーナリスト]

6月1日にコロンビア先住民族の一つアワ族のホセ・メロ・チンガルさんの講演会が開かれました。長年続くコロンビアでの国内紛争は、マグイ地区という山岳地帯に住む先住民族も巻き込んで、多くの犠牲や不安な日々を生み出しました。マグイ地区では9割もの人々が避難民となりました。2012年より和平交渉が開始され、治安も徐々に回復していく中で、マグイにも人々が戻ってきました。その中で、帰郷した人々は都市で経験してきた生活等から、改めて自分たちの伝統的な生活を見直し、自分たちにとって「大切な生き方」を再発見していきます。アワ族の学校建設はその一つです。アワ語の授業や、遠方の学生のために宿泊設備、給食制度を自分たちの力で作り出していく話は、参加した学生や市民にとっても、自分の「大切な生き方」を考える契機となったようです。通訳でもあった写真家の柴田大輔さんの美しいマグイの写真は、ホセさんの話をより充実したものとしてくれました。[平野]



写真左上：講演後にホセ氏と聴講者のみなさん、右上：講演する柴田氏、左下：講演者に質問する聴講者、右下：講師のお二人

[平成27年6月2日] 財政学I特別講演会

## 「わが国の財政の現状と課題：国と地方の視点から」

講師 ● 北海道財務局理財部 特別主計実地監査官・上席主計実地監査官 山口浩次氏  
融資課上席調査官 田村正和氏

6月2日(火)に、本学卒業後に北海道財務局で活躍されている山口浩次氏(経済学部OB)と田村正和氏(法学部OB)を講師に迎え、『わが国の財政の現状と課題：国と地方の視点から』というタイトルで、講演会を開催しました。山口氏からは、財務局の機能、予算編成の仕組み、予算の無駄遣いのチェックの仕組み、そしてわが国の財政の現状など、田村氏からは、国と地方の財政関係、地方財政の財務状況把握の4指標、市町村と財務局の関係などを、時に受講生に質問を投げかけながら、豊富なご経験をもとにお話しいただきました。約250人が受講しましたが、受講生の受講後の感想によると、財務局の業務がイメージできたこと、予算執行調査や実施計画承認事前調査事務などの予算の無駄遣いをチェックする仕組みについて、それがどの程度有効に機能しているのかなどに関心を持ったようです。山口氏、田村氏をはじめ、講演会開催にご尽力いただきました皆様に、感謝申し上げます。[野口]



講演する山口氏(写真上)と田村氏(写真下)

### From a Distance 4

## 「ダブルバインドと現代社会」

● 犬飼 裕一 [経済学部教授]

グレゴリー・ベイトソンという人が作った言葉に、「ダブル・バインド」というのがあります。あえて訳せば「二重拘束」ですが、矛盾した命令のことです。元来は心理学や精神病理学の分野の議論で、表向きの命令と言外の命令が矛盾していることが引き起こす疾患を問題にしました。いかにも不快そうな顔をして「また遊びに来てください」と言われた場合を思い浮かべるとよいでしょう。困りますね。多くの人はいやな気持ちになります。このダブル・バインドを、もっと広い分野にあてはめると、いろいろなことが見えてきます。たとえば、テレビの健康番組で、生活習慣病の恐ろしさを強調して、繰り返し肥満を解消しま

しょう、カロリーの摂取すぎに注意しましょうと「命令」します。しかし、同じテレビ局が、おいしい料理店の宣伝もやっている。「こってり濃厚、背脂たっぷりラーメン」なんてのが登場します。豚の脂身をどっさり追加したラーメンですから、カロリー高そうですね。テレビのグルメポーターが食べるように食べていたら、かなり太りそうです(現に太ってたりします)。こちらは「命令」ではありませんが、いうならば言外の命令。両方の「命令」に直面して、いったいどっちなんだ!という気分になります。タバコの宣伝なんか傑作で、いかにも旨そうにタバコを吸う俳優の写真に、「喫煙は、あなたにとって肺がんの原因の一つとなります」と書かれている。矛盾ですね。考えてみると、社会をめぐる難問の多くは、かなりの頻度で「ダブル・バインド」を含んでいます。ダブル・バインドを含んでいるからこそ難しいともいえる。

実は社会学者も手を貸していることがよくあります。一方で「組織に縛られない自由な生き方」を勧めながら、他方では、「雇用不安」を強調する。また、大企業中心の「社会」を当然と見なしながら、分業が進んだ大きな組織では避けられない仕事の「やりがいのなさ」を非難する。冷めた目で見ると、自分で掘った落とし穴に自分で落ちてしまっている。やはり、社会学にはふだんの自分を振り返る視点が必要なのです。



鯉稚魚の群れ photo: I.SASAKI



# 卒業後わずか4年でNPO法人設立！ 次代を担うリーダー育成に情熱を注ぐ、 地域コーディネーター

浜中 裕之さん

はまなか ひろゆき

学生時代からインターンシップのコーディネーターに関わり続けてきた浜中さん。インターンシップを教育と考え起業、人づくりに奔走する毎日だ。



▲プロジェクトの説明をする浜中さん

## NPO 法人北海道エンブリッジとは

今回の働きマン浜中裕之さんは、1985年生まれの30歳。主に大学生を対象としたインターンシップを企画、コーディネートするNPO法人「北海道エンブリッジ」を立ち上げ、その代表理事を務める。就職経験を持たず、いわば起業家として、前身である任意団体「ピオネイロ」を設立し、2012年に現在の「北海道エンブリッジ」として法人化を実現した。2008年本学部経済学科を卒業後わずか4年である。営利を追求する株式会社などではなく、NPO法人としたところに浜中さんの志がうかがえる。インターンシップは就職活動の中で良く聞かれる言葉だが、職業選択に役立つ経験を得る機会として、近年は参加する学生が多い。浜中さんは大学や企業、事業所などと連携して、他ではあまり行なわれていない特色あるインターンシップのコーディネートを行なっている。「北海道エンブリッジ」のホームページには次のような言葉がある。

『農業や福祉、観光など様々な分野で取り組んでいる企業や、行政機関・大学機関など多様なセクションと連携し、若者が地域に参画し・挑戦できる場づくりを行い、次代の社会を担う起業家型リーダーの輩出を目指します。』

そのような若者を育み続けられる「地域の教育力」の担い手として、NPO法人を立ち上げた。

## 教師への憧れから

元をたどると、小学生の頃に抱いていた「先生」になることの夢につながる。小学生の頃、先生が黒板を前にして指示棒を使う姿が格好いいと感じ、指示棒を使ってみたく思ったそうだ。1、2年生の時の先生が将棋を打って遊んでくれたり身近な存在として教師という職業に憧れた。父親が転勤族であった事

もあり転校も経験し、いろいろな先生と出会う中で教師になる事の夢を持ち続けていた。

大学進学を考えた時、教職課程がしっかりと位置づけられている大学が選択の要件だった。そこで、本学入学後はすぐに教職課程を履修し、アルバイト先は塾の先生というほど。教師実現への第一歩を本学で踏み出した。そこまでは順調な滑り出しだった。2年生になり、社会科の教師になるには社会を知ることが大事だと思いインターンシップを受けた。広告会社の営業だったが、細かな指示はせず任せてくれる会社で、大いに影響を受けた。「こんな職業教育もあるんだ」とその時に感じた。その経営者からは「仕事とは、働くとはどういうことかとか、広く言えば生きるとはどういうことかということに近くで接して直接聞きました。学ぶことが大変多くありました。その経営者、社員だけではなく、まわりのお客さんにも将来の事やこれまでの事を聞かれ、その中でいろいろな発見がありました。僕の中で学びは学校の中だけではないという意識が芽生えました」。インターンシップの体験は学ぶことがとても多かった。3年生の時には、その会社がインターンシップのコーディネートを事業として立ち上げる話があり、浜中さんがやりたいと手を挙げ、その会社で担当する事が出来た。営業体験で取り組んだ成果やお客さんに関わった実績でコーディネートしたり、ノウハウを持っている東京の団体に、毎月通って勉強したり、インターンシップでインターンシップのコーディネートを手がけるという、少し変わった体験が得られた。

## 起業の道へ進む

その頃から、自分は本当に教員になりたいのか自問自答するようになった。一旦、教職も塾の先生も辞め、他にやっていたことも一度整理して大学の授業とインターンシップに専念した。2年生から4年生までゼミに所属した伊藤淑子先生の指導で、札幌市内のNPO調査を行ったことの影響も大きい。進路にはさまざまな道がある事を教わった。また、教職を辞めたとはいえ、ずっと抱いていた「教育の現場」で仕事をしたいと

いう思いは残った。やはり育てる側の仕事につきたい。「教育は重要です。でも算数や国語を教えたいという訳ではなく、子どもたちが夢を持ったり、目標とする大人を見つけたり、早く大人になりたい、こんな大人になりたいと思ってもらえるような教育がしたいと思いました。大げさですが、教育を変えて社会を変えるんだというような意識でした。実社会でも同じで、スキルを身につけるとか、仕事の仕方を学んで欲しいという事ではなく、自分の夢ってなんだろうとか、社会とどうより良くかかわって行けばいいのかとか、そういうことを考えられるインターンシップ=教育が必要だと思いました」。

その結果、4年生になった浜中さんは、東京の人材関連企業からの内定があったにもかかわらず就職をせず、「教育の場」を自ら作る起業の道へと進んだ。起業して4年を経たいま、事業についてまだまだ課題は沢山あるが、着々と積み重ねている実感があるそうだ。その自分に向け、また後に続く後輩に向けエールをおくる。「札幌だけではなく、帯広など十勝地方や北海道全体を意識し、北海道全体を挑戦の場として地域に参画することが大事」と。また、大学進学の岐路にある高校生には「誰かの役に立つ、人の役に立つ経験を沢山して欲しい。仕事は誰かのために役に立つ事。感謝される事で形が見えて来る。バイトでもいい、レジでどうしたらお客さんが喜んでくれるだろうかとか。ひとりでは生きて行けない、誰かの役に立とうと思うとアイデアが出る。大学4年間は実験の場としてやる事を見つけて欲しい」とアドバイスをいたした。



profile .....  
1985年 留萌市生まれ  
2004年 札幌手稲高校卒業  
2008年 任意団体ピオネイロ代表就任  
2008年 本学部1部経済学科卒業  
2012年 NPO法人北海道エンブリッジ設立

# 1部ゼミ対抗 ソフトボール大会



▲決勝戦を前に山田ゼミI・IIと平野ゼミII、大会運営にあたる経済学部ゼミナール協議会のみなさん

毎年恒例「ゼミナール対抗ソフトボール大会」が、6月15日～19日の日程で開催されました。今年例年の会場、月寒公園の坂下グラウンドが改修工事のため使用できず、設備の整った高台野球場での開催となりました。人気の野球場を予約するために、主催の経済学部ゼミナール協議会の学生が、一斉に電話をかけて会場を確保してくれました。良好な環境の中で天気にも恵まれ、基礎ゼミ20、専門ゼミ32の合計52チームが、4日間にわたって熱い戦いを繰り広げました。学生の下馬評が高かった中園ゼミI・IIや、黒のユニフォームを揃えた西村ゼミI・IIなどが次々消えていく中、決勝まで勝ち上がったのは山田ゼミI・IIと平野ゼミII。いずれも多くの野球経験者を擁する強豪対決となりました。多数の女子学生がファールゾーンに並んで黄色い声援を送り、相手チームの心をくじく山田ゼミI・IIに対し、平野ゼミは全員男子の猛者揃いと、対極的なチームカラーでしたが、試合は4-3の僅差で、平野ゼミIIが見事優勝の栄冠を勝ち取りました。また3位決定戦では奥田ゼミI・IIと、今年も先生が選手として出場された大貝ゼミI・IIが対戦し、4-3で奥田ゼミI・IIが勝利しました。1年生チームでは野口基礎ゼミと宮入基礎ゼミのベスト8が最高でした。[西村]



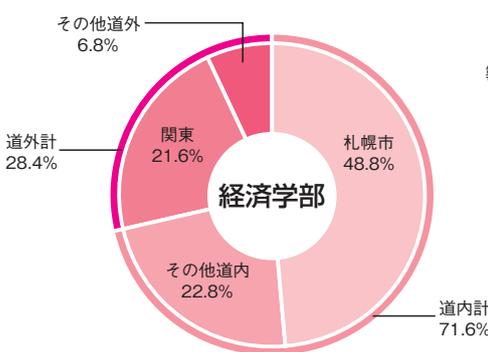
## 2015年就職情報 平成27年3月31日現在

2016年4月入社予定者を対象とした就職活動のスケジュールが大幅に変更になりました。企業による広報活動は入社予定者が卒業、修了年度に入る直前の3月1日以降とすること、選考活動は8月1日以降とする申し合わせがなされたためです。このため、昨年度よりも半年遅れた形で就職活動が現在行われています。

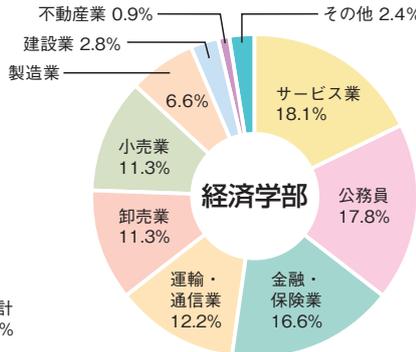
昨年度の経済学部の就職状況は、各グラフと表を参照してください。例年よりも道外就職の割合が高くなっています（2014年は道外割合が22.6%）。関東首都圏を中心に、採用を増やしている傾向にあるためと考えられます。

本学でもキャリア支援センターを中心に、様々なサポート体制を整えています。6月13、14日には、北海商科大学と合同で大規模な企業説明会を開催しました。当日説明会に参加した西友里愛さんに就職活動についてのお話をうかがいました。2年生の春休みにはゼミ活動の一環でタイに1週間滞在し、スラムの視察等を行うなど、ゼミ活動に積極的に取り組んできた西さん。製菓業界への就職を希望してはいるものの、合同説明会に参加して、周りの人たちから刺激をもらいつつ、自分が働きたいと思える会社に出会いたいと話していました。[大貝]

### ↓ 本社所在地別就職状況



### ↓ 業種別就職状況



今年3月には学内での業界研究会がスタートした

### ↓ 公務員・教員登録状況

名称	人数	名称	人数	名称	人数
国家公務員一般職	52	北海道職員 一般	30	札幌市職員 技術系	5
国税専門官	29	北海道職員 教育行政	4	札幌市職員 学校事務	2
労働基準監督官	1	北海道職員 技術	5	札幌市職員 消防	15
財務専門官	2	北海道職員 警察行政	29	その他市町村	126
裁判所職員一般職	5	北海道職員 学校事務	1	その他公務員(上記分類以外)	10
皇宮護衛官	1	北海道職員 警察官	74	公立学校教員(臨時含む)	47
自衛隊幹部候補生	3	北海道職員 女性警察官	15	国立大学等独立行政法人職員	69
自衛隊一般曹候補生	9	その他の警察官	2	総計	568
警視庁警察官	8	札幌市職員 行政	24		

[平成26年度卒業生・全学部]  
平成27年3月30日現在 (右表同)

### ↓ 過去3カ年の主な内定先

企業名	人数
北海道職員	24
札幌市役所	22
北海道警察	21
日本郵政グループ	14
マックスバリュ北海道	13
北海道信用金庫	11
空知信用金庫	10
札幌市消防	10
北海道労働金庫	10
北洋銀行	10

[経済学部のみ] ※ 公務員は合格者数